

長距離ドライブ

今日 あした

五月の連休前の金曜日、午後四時きっかりに玄関のチャイムが鳴った。
インターホンの向こうで

「わたし、バービーよ」と、明るい声が聞こえた。

「おう」と夫はインターホンに向かって返事をして、いそいそと玄関に向かった。柴犬のコロも尻尾を振りながらついて行く。ドアを開けて、

「変わってないねー」、夫が懐かしそうに言っている。

私は奥から大声で、

「すぐに行くから、車の所にいて」と言う

「はーい」とバービーの声が言い、玄関の戸が閉まり、外で夫と彼女の話し声が
続いていた。

バービーは、彼女のあだ名で、その名の通り、首が細くてスタイルが良い。
小さな顔には、黒目勝ちの大きな目と引き締まった口が収まり、周りから浮き
上がるほど綺麗な顔をしている。バービーと私は、同じ学区だったこともあり、
小学校から大学までずっと同じ学校に通っていた親友だった。

大学で私達は自動車部に入った。

自動車部は圧倒的に男子部員が多く、私の夫もその一人である。

私は記録係をしていたので、部室の片隅の机のあたりが居場所だったが、バ
ービーはたいてい部室の真ん中に置いてある汚いソファを占領して膝を抱え
て座り、ぼけっと雑誌や地図を見たり、部の男子とお喋りをしたりしていた。
何でもない仕草をしているも、彼女は手の先から足の先までほっそりと繊細
に形が整っていて、足先などは魅力的なハイヒールのような形をしていて、見
る度に体全体、神が造った芸術品だと思う。女子は数える程しかない自動車
部で、バービーはますます美しく、男子部員の誰もが、彼女と話したがって
いた。私はそんな彼女と親友なのが誇らしかった。

部の車はポンコツばかりで形も様々だったが、二十人くらいの部員は部室に
たむろして自動車をいじったり、ドライブの計画を立てたりして、入れ替わり
立ち替り、ドライブに行っていた。のっぽの夫は機械いじりが好きだった。

「わあー、RX8！相変わらず好きなのねー」バービーが大声を出す。

「古いけどね。それにしても、元気だなー、お二人とも」

夫は抱いていたコロをバービーに渡して、彼女のキャスター付きのトラックを車に積み込みながら、皮肉な調子で言っている。

「若いよ！ のっぽちゃんはずいぶん老けたわね、ねー」

抱いていたコロの顔を覗き込んで、同意を得るような調子で頭をなでて、口をすぼめながら背伸びをして、夫の白く薄くなった頭に故意に視線を移しておどけている。私が出て来たのを見て、彼女は笑っている夫の手にコロを返した。

「お待たせ」私も残りの荷物を積み込んで二人同時に運転席と助手席のドアを開けて乗り込んだ。

「お父さん、行ってくるわね」

「じゃあね、のっぽちゃん。鬼のいぬ間に羽でも伸ばしてね」

「そんな元気はないよ。制限速度を守れよ。年を考えてね……」

バービーのハイテンションに引きずられて夫まで浮かれている。コロも行きたくそうに尻尾を振りながら吠えている。私もウキウキとコロに手を振って車を発進させた。

新緑がさわさわと美しい甲州街道の並木道から中央道に入った。バービーが助手席で腕時計を見ながら

「ぴったり、予定通り！」とはしゃぎ、私は、

「当然！」と言い返し、すっかり学生時代に戻ったような気になった。

事の起こりは、彼女の欠札ハガキだった。

『義母 滝が、九十九歳で他界しました』という文面に私が反応した。

まだ四十代の頃、彼女は、姑のお滝さん（彼女は外ではそう呼んでいる）と仲違いをして、それ以来ずっと行き来をしないままに同じ敷地内に住んでいた。その内、私達の会話からお滝さんの名前が消えていたが、何年前に

「お滝さんが危篤で緊急入院したのよ」と聞いたと思ったら、その後の電話で

「一命をとりとめたので、又一緒に暮らすことにしたの」とバービー。

その後はお互いに連絡をとる余裕もなかったのか、年賀状のやり取りだけで何年もたっている。

思い立って、松の内が過ぎてから、何度か行ったことがあるバービーの家に、お線香をあげさせてもらいに行った時、

「お滝さんの部屋の神棚に上げてあるお札を、山口県にある神社に納めに行きたいのだけど、一人で山口まで行って帰って来るのも能がないでしょう、ねえ、春子さんも一緒に行って、何日かぶらぶら旅行してこない？」

とバービーに誘われた。私も子供たちが独立して夫婦だけの生活になってから、コロがいることもあり暫く旅行にも行っていない。面白そう、と乗り気になった。

「私も、このところ遠出をしていないのよ。ねえ、行くのだったら、もう少し暖かくなってからドライブ旅行にしない？」と言うと、

「えーっ、新幹線とレンタカーのつもりだったのだけど……」とバービー。

「我が家の車は整備が行き届いているから……せっかくのチャンスだもの、車にしましょうよ」

「……オッケー。相変わらず春子さんは無謀ね！」

こうして、もう婆様の域に達した親友同士の長距離ドライブが決まった。

「お滝さんは天命を全うしたのでしよう」

「そう、九十九歳でね。百までは行くと思っただけど……ほら、憎まれ者何とかって言うじゃない」

「長患いをしたわけでもないのでしょう、あなたが甲斐甲斐しく介護しているなんて想像できないものね」

「それは、お滝さんのことだから、死ぬ日までトイレには自分で行ったけど、やっぱり大変だったわよ」

「お疲れさま。よく持ったわね。お滝さんの最後を看取るなんて」

「でしょう！」

午後五時、釈迦堂のサービスエリアでトイレ休憩。

自動車部で記録係だった私は、インターネットで下調べをして予定表に〈満開の桃源郷が見られるかも〉と書き込みを入れていたのだが、花はもう終わっていた。

「残念！楽しみにしていたのに」バービーは予定表を膝に置いて大げさに残念がってみせる。

薄霞の南アルプスを見ながらサービスエリアを後にした。運転は交代ですることになっているのだが、私はまだハンドルを離さない。

甲府盆地を過ぎると、南アルプスが目の前に連なる。

「雪が残っていて綺麗ね」バービーが山並みを見ながら声のトーンを上げる。バックミラーで後方を見たら、富士山が山かげから姿を見せた。

「ねえ、後ろもすごいことになっているわよ」と言うと、バービーは後ろをふ

り返って、リヤーウィンドーいっぱい、迫るような迫力で見える富士山に
「ふわ〜あお」と意味不明の声を上げた。

雪が残った甲斐駒が左側に、右前方には八ヶ岳がグッと張り出してくる。太陽には薄い雲がかかっているが、山全体が見渡せる。

「自動車部のぼろ車で良く通ったわよね、この道」

大抵は、運転免許を取り立ての新米部員がハンドルを握っていたが、あの頃の喧騒がよみがえる。

「うるさかったわよね。ずっと怒鳴りながら話をしてなかった？」とバービー。
「そうだったね」

近くの山は、深い緑、白味を帯びた薄い緑、桜の淡いピンクと、目に鮮やかだが、遠景の、渋い色の濃淡で望む南アルプスも圧巻！ 自然の大パノラマだ。

耳に気圧を感じると思ったら、標高千七十五メートル、中央道で一番高い所という標識があった。ここから長い下り坂、冬枯れの草の所々にやわらかな緑が芽吹いている。あの頃はこの景色をどんな風に見ていたのだろう。

午後六時に、諏訪湖サービスエリアに到着した。

「軽いものでも食べましようよ」どちらからともなく食堂に足が向かい、諏訪湖が広がる窓辺の景色を眺めながら婆々二人で山菜そばを食べた。ここで運転交代。

* * * * *

運転を交替した途端、春子さんはうとうとし始めた。私はCDのスイッチを入れて音量を下げた。井上陽水の『傘がない』が流れ出す。へー、春子さんって井上陽水を聞くんだ、知らなかった。長い付き合いなのに……

小学校の頃からずっといじめられっ子だったなく。アスファルトの道路を見ながら私は子供の頃の情景を記憶の中に見はじめる。中学の時「バービー・バービー、バービー人形！」って囃し乍ら、男子も女子も私をからかった。耳をふさぎたいほどバービー人形って言われるのが嫌だったなく。それが始まると、いつも目立たないように、下を向いて時が過ぎるのを待っていた。

春子さんは他のクラスの子で話したことはほとんどなかったが、あの時初めてその光景を見たそう。怖い顔をして「バービー人形の物真似をしてあげなさいよ」と、怒ったように言って、私の手を引いてみんなの前に連れて行く

「私の真似をして」と耳打ちをして手をつないだまま、腰を振りながら、マリリンモンローのようにシナを作って空いている手で髪をかき上げる真似をした。その仕草はみんなを威圧するような凄みがあつて、私を救つてあげようというような、私に対する善意が凝縮しているようで、この人の為に、真似をしなくつちやあ、という気になり、無我夢中で春子さんの顔を見ながら、彼女のリズムに合わせて腰を振り膝を曲げて髪を掻き上げた。春子さんはニコリともしないでリズムを刻んで踊りながら周りを睨み続けている。

率先してバービー人形！と囃していた何人かは、突然始まった踊りに、勢いを呑まれたのか、腰が引けながらも悪意のこもった野次を飛ばし続ける。「人形が動いたぞ。ばか、ばか、へたくそ」。だが春子さんに浴びせる罵声は小さな声で聞こえない。その内、遠巻きにしていた子達が、踊りに合わせて初めは遠慮気味に、だんだん勢いに乗って、春子さんの仕草に合わせて手拍子を始めた。春子さんは小声でリズムを刻んで踊る。私も必死で春子さんに合わせて踊る。彼女は絶対に笑わない。周りの手拍子がだんだん大きくなると、前の方で野次を飛ばしていた子達も、きよろきよろと周りを伺いながら野次をやめて手拍子を始めた。それを「ギロツ」と確認してから春子さんは大きな声で「バービー行こう」というと、踊りをやめて向きを変えた。突然のことであっけに取られている周りの人を睨みつけ道をつくりその場から遠ざかった。

春子さんは充分遠ざかってから「バービー、勝ったね」と言つてにやりと笑つた。そうか、彼女は喧嘩をしていたのだ。そして勝つたんだ。

あの出来事で、いじめが無くなったわけではないが、怖くなくなつていった。

♪ 行かなくちやく 君に会いに行かなくちや 傘がない ♪ 井上陽水の
やわらかな音質が心地よい。

考えて見れば私達の学生時代にはカラオケなんてなかった。東京の郊外に引越した私立大学の敷地は広く、その一郭にあつた自動車部の部室と隣接する掘っ立て小屋のような修理部屋、そこに行けばいつも誰かがいた。

四年になって、就職先が決まった人、決まらない人がごちゃごちゃしている時期。私がめずらしく一人で先に帰つた時だった。偶然のつぼちゃんが現れて「バービーはもう就職、決まったのか」とか、

「どんなことがやりたいのだ」と、一緒に歩きながら話しかけられた。のつぼちゃんは美男子だけど気が弱そうで大人しいし、まともに会話をしたこともなかったもので、何か言いたいことがあるのかも知れないと受け答えをしながらも、

告白されたらいやだなと、身を固くしたことがあった。それからしばらくして、春子さんとのつぼちゃんが付き合っていることを知った。春子さんに聞いたのではないし、それまでも彼女は付き合っている人のことを絶対に話さなかった。私は誰かと付き合うとすぐに春子さんに打ち明けるのに……。

諏訪から辰野まで山桜がきれいだった。午後七時前、木曾駒のあたりで日が暮れた。三日月の隣に星がまたたいて真っ暗な夜空にひとときわ明るく見える。運転をしながらお滝さんとのことが、私の頭の中で断片的に粟粒のように浮かび上がる。

トオルの父親は仏壇に納まった写真でしか知らない。私が結婚した時は、広い家にはお滝さんとトオルが二人で住んでいた。

お滝さんはトオルにとって継母だが、中々のやり手で、お父さんの遺した財産や土地を上手く活用していたので生活に余裕があったのだろう、私達の結婚を機に二世代で住めるようにと、その広い家を真ん中で仕切って改築してくれた。お滝さんは小柄でぼっちやりして、やさしい顔をしていたし、性格も決して意地悪ではなかった。

お滝さんの居間には神棚があつて、近所の八幡神社のお札が祀つてある。立派な仏壇もあり、朝晩熱心におがんでいた。お供えのお菓子や果物がいつもたつぷり上がっていて、それを取り換える度に我が家にまわつて来るので、お菓子や果物には事欠かなかった。あの頃は、私も頂く度に「お母様、ありがとうございます」と感謝をして……可愛いお嫁さんをやつてたこともあったのだ。

「バービー、なにをにやにやしているのよ」助手席で春子さんが笑っている。

「あれ、起きたの？ お滝さんのことを思い出しちゃって……」

「ああ、大変だったものね」

車は、中央道を出て東名に入り、しばらく行くと名神に続く、東名も名神も道路公団の造つた道なのに、明らかに雰囲気が違う。東名は『ザ・高速道路』といった感じがするのだが、名神は『一般道とは少し違う道』の印象がある。現に、様々な色の明かりが氾濫して景色に活気がある。周りが建て込んでいる所為かも知れない。

お滝さんの神棚に、八幡神社のお札と並んで、後光神社のお札が祀られるようになってしたのは、結婚してからすぐに生まれた彰が、中学に入ってからだった。

その頃、お滝さんの所には、山本さんと、清原さんという女性が来て、三人

で声を合わせて『後光大明神』に祝詞を上げるようになった。その内、お滝さんは彼女達が来る日に盛大にご馳走を作るようになり、私も手伝う事になった。「山本さんと清原さんのお宅では、毎月、お一日に、神様のお祭りをなさるのよ。それで、いつもおかあちやまもお呼ばれていたのだけど、これからは家でもお祭りをさせてもらうことにしたの。あなたも、その日はちよっとお手伝いをしてね」

彼女は舌っ足らずの言い方をする。

「いいですよ」

三カ月に一度くらい、お母様のお友達が見えるのだったら、サービスをしなくっちゃ、と思ったけど、いざとなると結構苦痛を伴う。前の日からお料理を作り、当日はそれを出したり下げたり。初めはお滝さんも手伝っていたが、その内お財布ごと渡して、「これでお願ね」とちゃっかりしている。私も一人で支度をする方が手順が楽だとは思ったが、すんなり受け入れ難く「何で私が」、とつい思ってしまう。

一年もすると、その日は私にとって苦痛の日となり、その二三日前になるとお滝さんの悪いところばかりが私の頭を去来する。献立は何にしよう……と考え、里芋と人参、椎茸のお煮つけを作って……。

そう言えばまだ結婚して間もない頃、楽しみにしていたテレビドラマの「暁の恋」を見ようと思って時間を調整しながら里芋を剥いていたら、お滝さんがやって来て剥き方の講釈をはじめた。虫唾が走るほど鼻にかかった声でくどく、しつっこく、本人は自分の優しさに酔ったように説明をしてから、さあ、あなたもやって御覧なさいと、包丁を渡された。

「暁の恋」の続きが見られなかった口惜しさもあって、今でも思い出す度に怒りがこみ上げる。

あー、献立は……、生鮭のホイル焼きと、平貝、海老、青柳に胡瓜とうどをあしらって黄味酢和えを造ることにして、ご飯は光琳ずし……蟹缶をあけて、人参の千切り、グリーンピースは缶詰でいいか……。ああそれからお吸い物もつくらなくっちゃ……

こないだなんか「タオルはもう帰っているかしら」と中廊下から入って来て、お風呂に入っているタオルに、内と外で知り合いの小母さんから掛けて来た電話の話を長々と喋っていた。非常識にもほどがあるわよ。タオルもタオルよ、平気でお喋りに付き合っているのだから、信じられない。

次から次に嫌なことが思い浮かんでくる。

お滝さんは、神様の日は毎回必要以上にお礼を言い、ありがたがり、料理を褒めちぎる。私はその度に、うんざり、げんなりしているのだが、他人の気持ちに寸托する事も無く挙句の果てに

「祝詞をあげている時は、あなたも一緒に正座をしていてね」と言い出した。「いやですよ！」私は反射的に言ってしまった。

「まあ！でも山本さんや清原さんのお宅でも、お祈りしている間はお嫁さんが、きちんと正座をして控えているのよ」

「私は信者でもないのに何で……だいたい、お母様のお友達が見えるのに、どうして私が加わらなくちゃならないの」

「そんなことを言って！……あなたは何もわかっていないのね。おかあちゃんが祈りしているから、いつも神様が見守って下さるのよ。トオルもあなたたちも、幸せでいられるのは神様のお陰なのよ。山本さんや清原さんは、とてもお力がありになる方々で、お二人がいらして下さるのも神様のお導きなのよ」
「だいたい、自分のことを『おかあちゃま』なんておかしいわよ、いい年をして。実の母親でもそんなことは言わないわよ。それに、あの二人も、その内、翡翠の置物かなんか持ってきて、お母様は売りつけられるのじゃないの」

「ひどい、何ということ、そんなことを言うと言が当たりますよ」

「どうぞ、どうぞ、罰でも何でも当てて下さい。そんなことを言うのだったら、これからは神様の事はもう何もしませんが。何でも神様にして貰えばいいでしょう。私のことは一切、神様にお祈りしないでください」

「まあ、あなたって人は……あなたのような人がいたら、トオルにとって良い事なんかありませんよ。トオルが帰って来たら相談しますから」

私が思い出に浸っていたら、春子さんがぽつりと言った。

「私も思い出したわ、お滝さんのこと。あなたたち一家のことも私がお祈りしているから平穩無事に過ごせるのだから、あなたも皆さんと一緒に神棚に手を合わせなさいと言いだしたのよね。でも、バービー、あの時、罰を当てて下さいとか、祈らないでくださいとか言ったのよね。なんだか本当に罰が当たってしまいそうじゃない？ 摩訶不思議なものって、怖くなかった？」

「こっちは頭に血が上っているのですもの、怖くなんかなかったわよ。それにあのご馳走を作らなくていいと思ったら清々していたわ。もう限界だったのよ。

でも今だから言うけど、あの頃、私、車を電柱にぶつけたのよ。一人で乗っていた時だったし、怪我もしなかったから、車の修理をしてそれで済んだけど

……祟りかな、なんてちらっと思ったりして……」

お滝さんはトオルに言いつけたはずなのに、彼はいつまで経っても何も言わない。私の方から

「お母様、怒っていたでしょう、何か言われたのじゃないの」と聞いたなら

「まあ、でも、あの人には、実の親でもないのに大事にしてもらったからな。あの人は僕の為に自分の子どもを産まなかったのだ。親父が結婚をする時に条件を付けたって言うていた」。そう言ったのだが、その後、すぐに大阪に転勤。彰の学校のことを考えて単身赴任にして貰ったけど、結局定年になるまで単身赴任をくり返していた。

「あの後、通路になっていた廊下の仕切りに鍵をかけて一切行き来をしないのだったって言うていたけど、いつ和解したの？　そう言えばあれ以来、お滝さんの話、聞いたことが無かったわね」春子さんが言った。

「まったくの絶交状態だったからね」

「それなのに、山口までお礼参りをするの？」

「トオルが定年になってから通路の開かずの扉を開けたのよ。トオルが単身赴任をしている間も、お滝さんは旅行にかこつけて度々トオルの赴任先に行っていたのよ。もちろん、お滝さんと私は一切没交渉だったから開通当時はトオルだけしか通らなかつたけど……」

今から三年位前のことだけど、トオルがオロオロして、お滝さんが風邪をひいたみたいで、昨日から炬燵に横になって動かないからちよつと見てくれて言うから行ってみたら、顔が土気色をしているのよ、それで近所の丸山先生に往診してもらったのよ。そうしたら腎不全の一手前だつて言われて、緊急入院。仕方がないから私もついて行ったのだけど、ずーっと『痛い、痛い』って言いっぱなしなの。その上、神棚に供え物をして拝んでくれ、とか、お札を持ってきてくれとか、トオルにじゃなくて私に言うのよ。もう大騒ぎで……。私、聞いていられなくて、お滝さんの部屋で後光神社の電話番号を調べて、電話をしたのよ『長年お宅の神様を信仰している者だけどつて、お滝さんの名前を言うて、とても痛がっているから、痛みが治まるように祈って下さい』って。信心なんて自己暗示みたいなものでしょう、病院に行ってお滝さんに言えば、痛みが止まったような気になるのではないかと思つて。そうしたら、病院に行つたときにはもう痛みが治まっていたのよ」

「へーっ、そんなことがあるのね、後光神社ってすごい威力じゃない。それでバービーは信心を始めたとか……」

「まっさか」

結局一カ月入院して、その後リハビリセンターで三カ月リハビリをして家に帰って来たのよ。その時が九十五歳。さすがに一人暮らしをさせる訳に行かないじゃない。それでもお滝さん、自分の身の始末は何でもやっていたのよ。お風呂も一人で入っていたし。神様、神様って、ぶつぶつ言いながらね」

「すごいわね、お滝さん。死ぬまで自分でトイレにも行っていたのでしょう」

「紙おむつをしながらだけどね」

街の明かりがまばゆく灯っている大阪を抜けて、中国自動車道へと進み、西宮名塩のサービスエリアで小休止をした。そこで柿の葉寿司やサンドウィッチを買い込み運転を交代。あー疲れた。

* * * * *

のつぼちゃんとは、お互いに就職をしてからすぐに結婚をした。四年生になつてから付き合い始めたのだけど、彼はバービーのことが好きなんじゃないかって、胸のどこかでモワモワシしていた。バービーはモテモテだったから……私は形なりばかり大きくて男か女かわからないようなタイプだったし……でも、バービーも彼が好きなら二人が結婚をしてもいいかな、と思っていたような気もする。本当はどうだかわからないけど……。それでも、彼女がトオルさんと結婚した時は、のどに引っかかっていた小骨がするっと抜けたような気分だった。

夜中はひんぱんに運転を交代した。

こんな時間の中国自動車道は、ほとんど行き交う車はなく、時速百キロを意識しながら運転していると、いくら運転が好きでも「物好きだな」"とつくづく思う。夜中の三時を過ぎると、「ねむたい！ねむたい！」たくさん買い込んだ眠気覚ましのガムをクチャクチャ。

土曜日午前五時前に、下関インターで高速道路を下りて、火の山公園に向かった。ここは、バービーが下調べをしてくれたところで、展望台から関門海峡が一望できた。右手には、巖流島があるはずだが、ここからは見えない。

今日も良い天気。朝もやのかかる海に徐々に光を増してくる。

我が家から関門海峡までの走行距離、千百十キロ。

お滝さんが信仰していた後光神社は、火の山公園から三十分程走ったところにあつた。鳥居があるわけではなく、鄙びた田舎の大きな農家のような印象で、敷地に何軒か建っているうちの一つに「後光神社」と、表札のように書かれた建物があつた。案内を乞うと、奥から五十歳くらいの女性が出てきて、両開きの引き戸を開けてくれた。中は五十畳くらいの畳敷きの部屋で、一番奥に胸の高さの神棚があり、榊や御神酒が供えられていて、お婆さんの写真が中央に飾られていた。バービーは、その神棚の上に分厚い封筒を置いて、手を合わせた。

それが終わると、神社の人に、入り口の脇にある応接間に案内された。お滝さんは、度々ここを訪れては一日二日泊まっていたそうだ。神棚にあつた写真のお婆さんが、この神社の開祖で、大いなる力で近隣の人を助けたという話だつた。

「三年程前になりますが、滝さんが苦しがつっていると、お電話をさせて頂いた者ですが、あの後すぐに痛みが去りました。ありがとうございます」バービーが神妙に神社の人に言うと、お祈りをしてくれたというお婆さんが奥から出て来た。

「それはよかつたですね。電話を受けてからすぐに神様をお願いしたのでですよ」と言い「私は、開祖の娘ですが、開祖ほどの力はありません。でも、良かったですね、痛みが治まつて」

「信者の方は、何人くらいいらつしやるのですか」

「全国に五十人くらいいらつしやいますが、後継ぎがいなくなつて……」

三十分ほどそこにいたのだが、神様は穏やかなお婆さんだつた。

「翡翠なんか売りつけそうもない人だつたわね」

バービーが悪戯っぽく言った。

「お滝さんとは、何年くらい口を利かなかつたの」

「そうね、二十年以上かしら」

「その間、バービーの頭からお滝さんを締め出していたの」

「そんなわけないじゃない。いつも五感で意識して、いやだいやだと思つていたわよ。」

「ふーん、それでもお礼参り？」

「ええ、お滝さんの全財産をトオルが引き継いだのよ。それは大したもの、義父様が遺してくれたものの何倍にもなっていたの。トオルはお滝さんに優しかったけど、実際にお滝さんを支えてくれていたのは、彼女の神様だったでしょう、神様神様って言いながら、動かない手足を動かしていたし、つらい苦しいと神棚に向かって言っていたのだと思うのよ。少なくとも、嫌だ嫌だと思っていた私は世話はしたけどお礼を言ってもらう筋合いはないでしょ。だからせめて、お礼参りをしようと思ったのよ」

「あの分厚い封筒がお滝さんのお礼なのね」

「そうよ、五十万、奮発したでしょう」

「山口市内・湯田温泉って標識がある方に行って」バービーに言われてハンドルを左に切った。

「湯田温泉には、坂本龍馬も泊まったという、とっておきの温泉旅館があるのよ。」

「あるのよって、バービー、そこに行くの」

「そう、なかなか予約が取れないのよ……」

「そこに泊まるの」

「そうよ、山口に朝着くって連絡してあるから、ゆっくりできるわよ。お滝さんのおごりで！」

了